

■ 結果と過程 ■

佐藤正彦の『プチ哲学』という本に、「魔法の杖」という4コマ漫画が載っている。

①1匹の若いカエルが、魔法使いに「あこがれのケロ子ちゃんと一生を添い遂げたいのです」と願い出た。②「よし、叶えてやろう」。魔法使いは、魔法の杖で地面をトンと突いた。③すると、モクモクと煙が現れ、若いカエルを包み込んだ。④しばらくあつて煙が消え去り現れたのは、腰が曲がり杖を持ったカエルの老夫婦だった。瞬時に年老いてしまったカエルはつぶやく。「そうじゃなくって…」。

もう一つ。①1匹の猿が、魔法使いに願い出る。「一度でいいからバナナをおなかいっぱい食べてみたいです」。②「よし、叶えてやる」。魔法使いは、魔法の杖で地面をトンと突いた。③すると、モクモクと煙が現れ、猿を包み込む。④煙が消え去ると、猿のおなかにはバナナでパンパンに膨れ上がっていた。猿はつぶやく。「そういうことじゃなくって…」。

クスリと笑ってしまうこの漫画の面白さは、カエルは大好きなケロ子ちゃんと互いに好意を寄せあう仲になり、結婚して、生涯にわたり睦まじくありたいと願い、猿は普段幾分か我慢をしているバナナを心ゆくまで味わいたいと願ったのに対し、魔法使いが一瞬で最終の状態にしてしまったところにある。「結果」が目的なのではなく、目的は「過程」そのものであったということだ。

「結果」と「過程」のどちらが重要か？ よくなされる議論である。一般的には「結果」はとても重要で、特にプロと呼ばれる世界では、スポーツであれ、ビジネスであれ、いくら途中経過がよくても、よい結果を出さなければ評価はされない。それはそれで健全で、対価として報酬をもらう以上は当然とも言える。

しかし、それに反して、先の笑い話のように、結果だけでは意味をなさない事柄も日常には少なくない。学校は子どもが成長する場としてあるのだから、学校生活では、結果よりも成長の過程を大切にしたい。

本校新聞部発行の学校新聞「いずみの原」のコラム欄は「屋上欄」という。5月30日付の「屋上欄」が部活動に対して、結果至上主義に陥らず、過程こそ重視すべきであると論じていた。曰く、「日々の部活動で結果を求めることは重要である。しかし、仲間と切磋琢磨し、試行錯誤を繰り返す過程こそが私たちを成長させてくれるのではないだろうか」。

先行競技を除いて、県の総体・総文は明日からが本番。「屋上欄」は「コロナ禍の今だからこそ部活ができることに感謝し、悔いの残らない過程をたどっていきたい」と結んでいた。その通りであってほしいと願う。その上で、もし悔いの残らない「過程」をたどれたのなら、遠慮なく「結果」も求めてもらいたい。「過程」のない「結果」は意味をなさないが、「過程」のある「結果」はとても大きな意味を持っている。